

羽根戸原 C 遺跡 5

—羽根戸原 C 遺跡第 6 次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1399集

2020

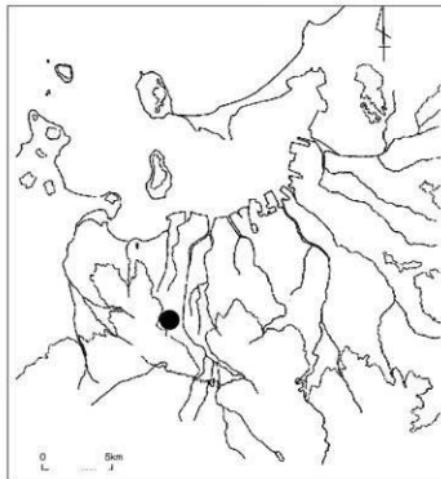
福岡市教育委員会

HA NE DO BARU

羽根戸原 C 遺跡 5

—羽根戸原 C 遺跡第 6 次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1399集



調査番号 1719

2020

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は社会福祉施設建設に伴う羽根戸C遺跡第6次調査について報告するものです。調査では古墳時代初めの住居跡を中心とした集落跡を確認することができました。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、社会福祉法人飯盛会様をはじめとする関係各位には発掘調査から本書の刊行に至るまでご理解とご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

令和2年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

例　言

1. 本書は社会福祉施設建設にともない実施した羽根戸原C遺跡6次調査の報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて座標北で、座標は世界測地系による。
3. 検出遺構には検出順に3桁の連番号を与え、性格を示す記号としてSC（竪穴建物）、SD（溝）、SK（土坑）、SP（ピット）、SX（その他）を頭に付した。
4. 掲載した遺物の番号は、通し番号とし、挿図と図版の番号を一致させた。
5. 本書に掲載した遺構・遺物実測図の作成、写真撮影は池田祐司が行った。
6. 本書に掲載した挿図は井上加代子、池田が行った。
7. 本書の執筆・編集は池田が行った。
8. 本書に係わる記録類、遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収藏・保管されるので活用されたい。

本文目次

I	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査組織	1
II	立地と環境	2
III	調査の記録	4
1.	調査の概要	4
2.	遺構と遺物	6
(1)	土器だまり	6
(2)	竪穴建物	12
(3)	溝	15
(4)	土坑・ピット	17
(5)	そのほかの遺物	23
IV	おわりに	26

I はじめに

1. 調査に至る経緯

平成28（2016）年2月3日付けで個人より福岡市教育委員会あてに、西区大字羽根戸字門ノ前594番1における社会福祉施設建設に關わる埋蔵文化財の有無の照会が提出された（27-2-974）。申請地は周知の埋蔵文化財付蔵地である羽根戸原C遺跡の範囲であり、これを受けた埋蔵文化財課では申請者との協議の上、平成29年5月15日に確認調査を実施し、古墳時代の遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課では申請者に対して申請地に遺構が存在し、計画された工事では遺構に影響が及ぶため発掘調査が必要である旨回答した。その後、平成29年7月10日付けで社会福祉法人飯盛会より同地における開発計画事前申請書（29-2-339）が提出された。埋蔵文化財課では先の確認調査の結果を元に、申請者との協議を行ったが、予定建築物の構造上、工事による遺構の破壊が避けられないため、平成29年度に発掘調査、30年度に整理・報告を行い、記録保存を図ることで協議が成立し委託契約を締結した。申請地891.15m²のうち調査対象としたのは工事で埋蔵文化財に影響がある270m²であり、駐車場等として使用される残地については工事の影響が及ばないため現状保存している。

発掘調査は平成29（2017）年9月4日から9月21日に実施した（調査番号1719）。調査面積は307m²で、遺物はコンテナ12箱分が出土した。

整理は30年度に実施したが、報告については31年度に行うことで変更契約を締結した。

調査にあたっては社会福祉法人飯盛会、地権者をはじめとする関係者の皆様および近隣の方々からご理解をいただきと共に、多くなご協力を賜りました。ここに記して感謝いたします。

2. 調査組織

調査委託 社会福祉法人飯盛会

調査主体 福岡市教育委員会

調査統括 文化財活用部埋蔵文化財課

課長 常松幹雄（平成29年度）

大庭康時（平成30年度）

菅波正人（令和元年度）

調査第1係長 吉武学

松原加奈枝

清金良太

庶務担当 文化財活用部文化財活用課

事前審査 文化財活用部埋蔵文化財課

調査担当 文化財活用部埋蔵文化財課

池田祐司

遺跡名	羽根戸原C遺跡	調査次数	6次	調査略号	HNC-6
調査番号	1719	分布地図図幅名	105 叶岳	遺跡登録番号	0399
申請地面積	891.15m ²	調査対象面積	270m ²	調査面積	307m ²
調査期間	平成29年（2017年）9月4日～9月21日			事前番号	29-2-339
調査地	西区大字羽根戸字門ノ前594番1				

II 立地と環境

早良平野の西を限る山塊の一つである飯盛山からは、東へ向かって扇状地が広がり、これを小河川が分断している。羽根戸原C遺跡はそうして分断された扇状地の一部に広がる遺跡の集合であり、東西約1200m、南北約500mにおよぶ。遺跡の西端は標高46mで羽根戸古墳群N群が分布する丘陵に接し、東端は標高15mほどで室見川の氾濫原に臨む。遺跡は北側を道隈川の谷で限られ、南側は日向川とその支流で限られる。現況は東へ下がる緩傾斜地で段差をなして水田が営まれ、宅地化が進んだ周辺に比べ、旧地形を残している。

羽根戸原C遺跡では、1983年以降に5次の調査が行われている（図2）。1次調査（1983）は水路建設に伴う試掘調査で弥生中期から後期、中世の遺物が出土している。壱岐丘中学校建設に伴う2次調査（1984：134集）では、旧石器時代の包含層、縄文時代の土坑、弥生中期の壺棺墓、弥生終末から古墳初頭の土坑、6世紀から11世紀の堅穴建物・掘立柱建物、鍛冶炉など多数の遺構遺物が出土している。4次調査（1985：188集）は道路拡幅に伴って遺跡を南北に横断する地点で調査が行われ、弥生中・後期の集落跡、古墳時代の溝状遺構、弥生時代から中世の河川が出土した。特に北半では弥生時代の遺構を密に検出している。第3次（1985～1986：180集）、5次（2001：817集）調査は、今回の6次調査に近い遺跡西半で、道路建設および拡幅に伴って実施し、弥生時代終末から中世までの遺構が著しく重複して出土した。特に弥生時代終末から古墳時代初頭の堅穴建物と遺物は類著で多くの遺物が出土している。平成2、3年度には区画整理事業にともなう確認調査が行われ、3、5次調査の北側の遺跡中央部のトレンチでは、特に弥生時代後期から古墳時代の集落、墓地が検出され、遺構が広がることが確認されている。今回の調査区は遺跡範囲の西端に近い位置にあたり、平成2年度の確認調査で遺物包含層とピットが確認されていた。

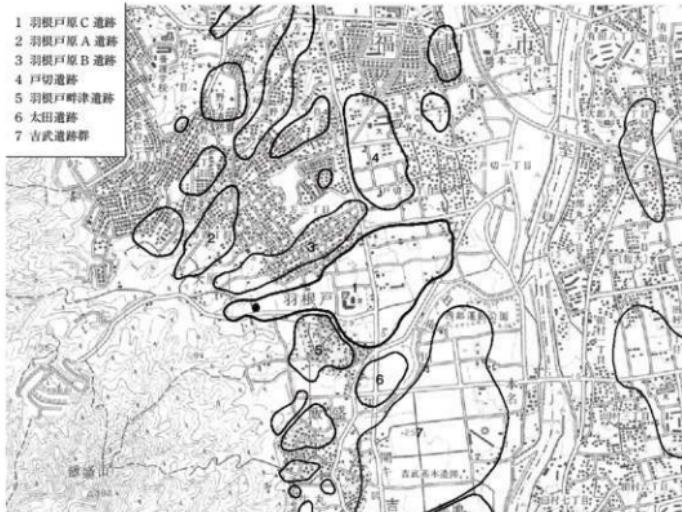


図1 羽根戸原C遺跡位置図 (1/25000)

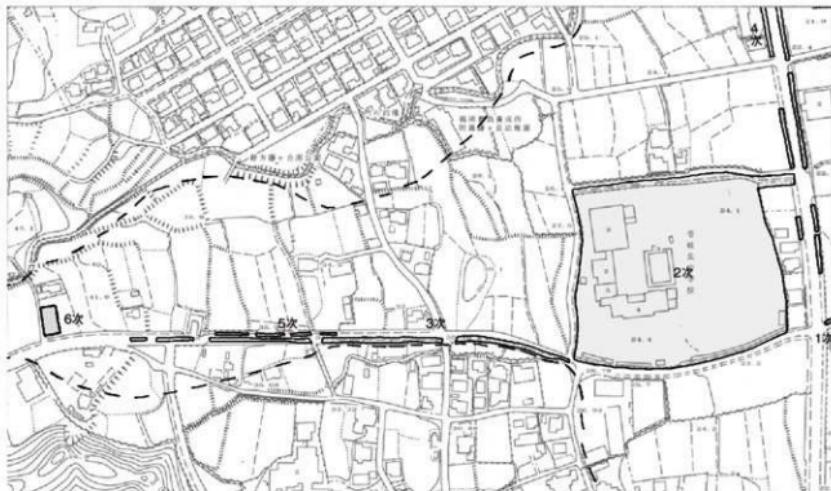


図2 調査地点位置図 (1/4000)

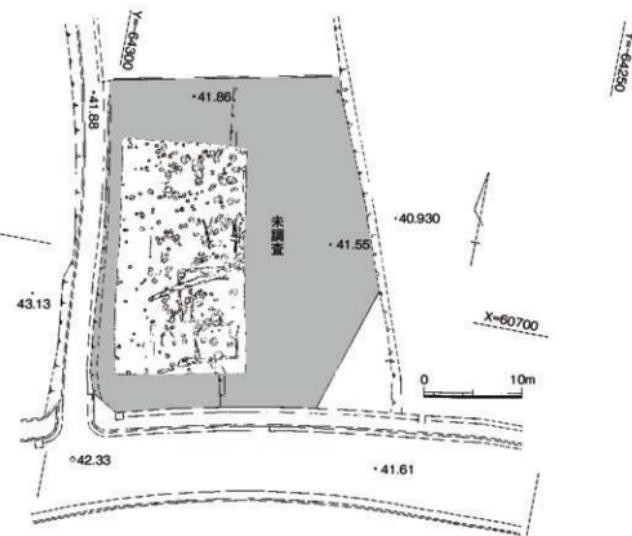


図3 調査地点位置図 (1/500)

III 調査の記録

1. 調査の概要

対象地の現況は2枚の田面で、南を市道羽根戸1335号線に、西を市道1350線に面し、北は民家に接し、東は田地が広がる。2枚の田面は畔で南北に区切られ東が25cmほど低い。さらに東側の隣地とは60cmほどの比高差がある。道路との比高差は南西隅が最も大きく55cmほどで、北西端、南東端は7cmほどである。標高は西側の区画で41.8mほどで、東に早良から福岡平野を見渡すことができる。

調査範囲は対象地の南西寄りに建設される施設の工事範囲で、他は道路面まで盛り土される。調査は重機で表土を除去した黒色砂質土または砂礫層上面で遺構を検出した。

遺構実測は調査区の形状にあわせて任意に設定した基準線をもとに1/20平面実測を行い申請書の現況図に挿入した。図3・5の座標もこの現況図による。レベルは3級基準点から650mを移動した。

検出した遺構は古墳時代前期の堅穴建物2棟、土器だまり、土坑、溝、ピット、遺物包含層である。堅穴建物は南東側に近接して出土し、1棟は床面と側溝のみの検出である。堅穴建物の東よりも黄褐色土の遺物包含層またはくぼみ状の土器だまりが重なり、つぶれた状態の土器がまとまって出土した。調査区の北半には土坑もしくは大型の不整形ピットが分布し、弥生時代後期から古墳前期の遺物を含む。柱穴として建物を想定することはできなかった。遺構の覆土は堅穴建物や南側の遺構はやや粘質のある茶褐色土から暗褐色砂質土で、少ないが黒褐色砂質土のものもある。北半の土坑、ピット群は黄色を帯びた淡い灰褐色土を覆土とする。南北で遺構の様相が異なる。なお南東隅付近では耕作土下の茶褐色土が遺物を含み、包含層として取り上げた。図6東壁土層の2b'層に対応する。

出土した遺物はコンテナケース12箱で、弥生時代後期、古墳時代初頭の土器を中心とし、古墳時代の須恵器片少量、瓦片などが出土している。また、平底式土器、押型文土器、石鏡など縄文時代の遺物も少量ながら出土した。

層序 図4、6に調査区北壁、南壁の土層図を示した。1層耕作土、床土および耕地造成に伴うと考えられる2層を除去した面で遺構を確認した。遺構面は図4の東壁の黄褐色土4層上面であるが、4層の広がりは一部であり、黒色砂質土5層、砂礫層または黄白色砂質シルト6層が露出する。遺構面は全体に東側へ下がり、また南東、北東へ低くなる。東西は自然の地形に沿うが、南北への落ちは土地の造成等の影響もある。

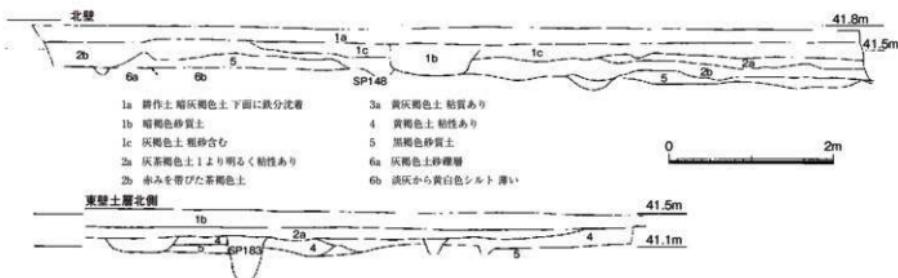


図4 北壁、東壁北半土層図 (1/60)

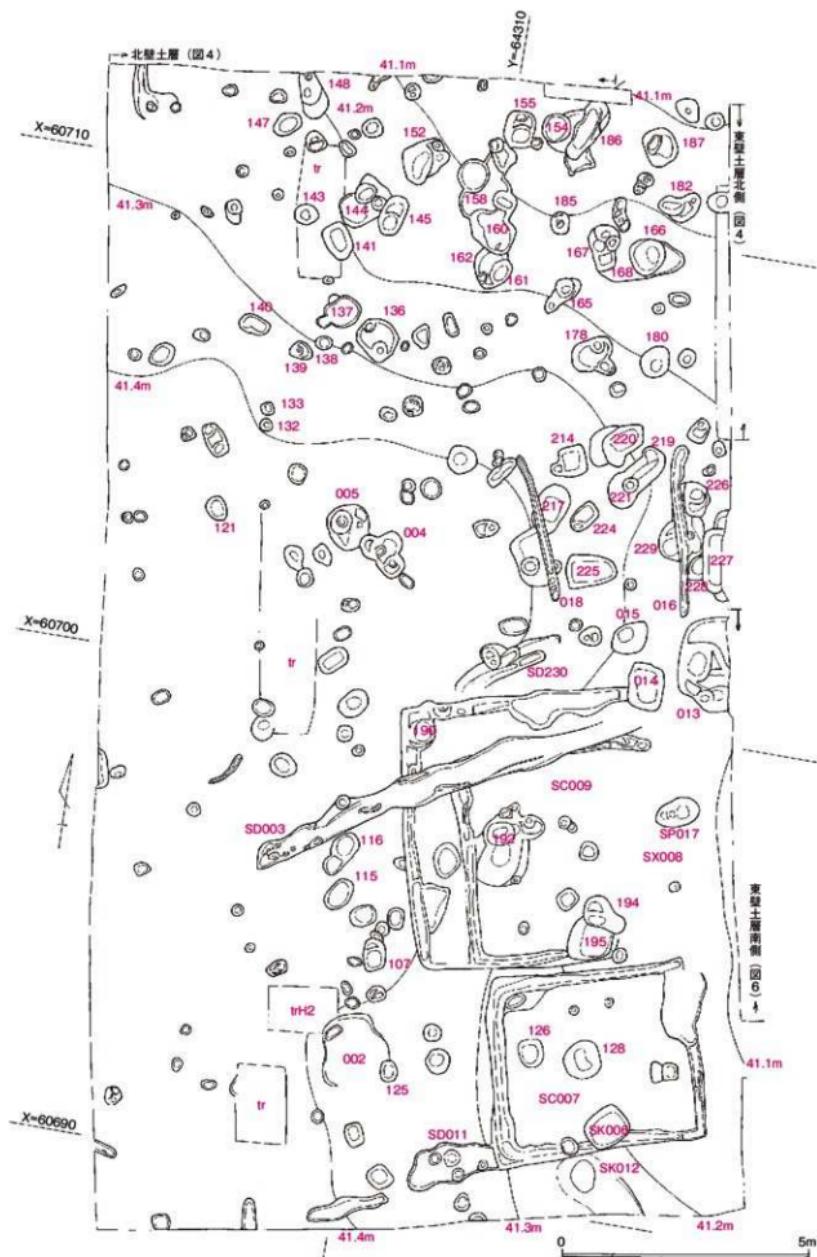


図5 遺構配置図 (1/100)

ると考えられる。4層は比較的高い調査区中央部分に残り、また東側北半の壁際にみられ調査区外に広がると予想される。遺構面は5層の黒色砂質土の面が広く、南東、北東部では6層となる。北東側の4層上面では黄灰褐色のビットの検出が困難で、一部4層を下げて検出に至った。また北西側は薄くなつた5層を掘りすぎている。遺構は西側に薄く、削平が大きいと考えられる。

2. 遺構と遺物

(1) 土器だまり

SX008 (図6) 調査区東側南寄りに黄色が強く遺物を多く含む包含層を確認したため、周辺の遺構面

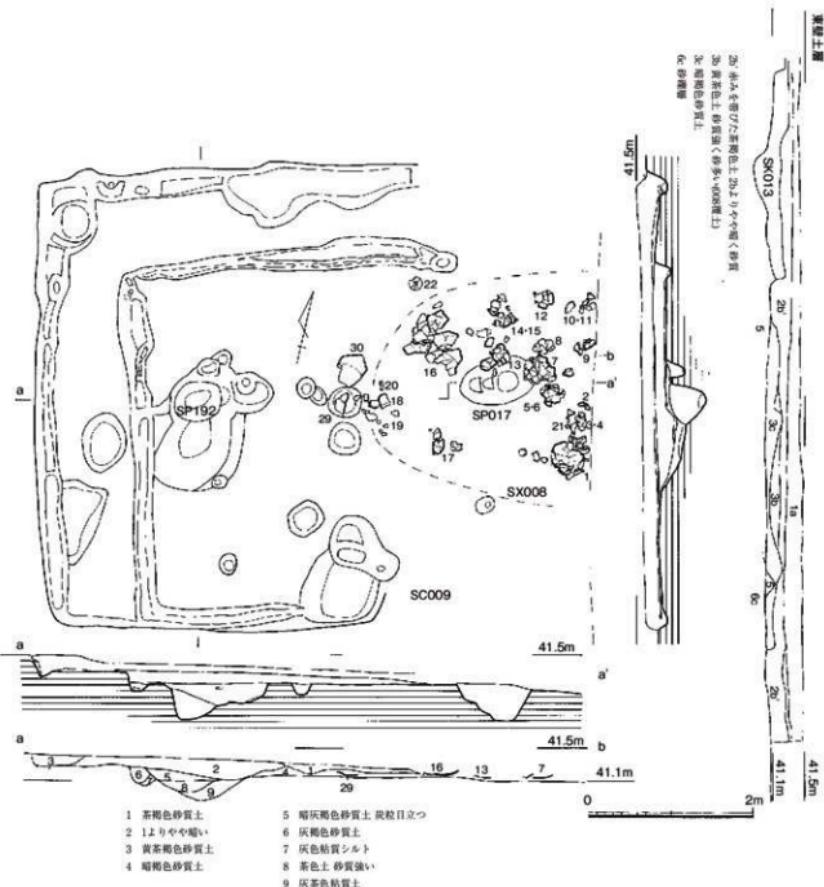


図6 SX008、SC009、東壁南半土層実測図 (1/60)

よりやや高いレベルで表土掘削を止めて遺構検出を行ったが、明確なプランは確認できず、SC009の覆土の上部とも明確に区分できなかった。覆土の黄茶色土はやや粘質で締まりがない。横倒しの土器が連なって出土し、土器と黄茶色土を追って掘削を行った。SX008西側のSC009を切っていることは確かであるが、SC009の覆土を区別できずに一緒に掘削している。東壁土層では3b層が黄茶色土で平面的に最も黄色が強い箇所と一致する。ただし東壁では3b層はSX008の範囲より狭く、東側は広がりが収束すると考えられる。下層の3c層は暗褐色で3b層と異なる。008で取り上げた遺物はこの層の上または一部層内からも出土した。3c層は東壁で南側に立ち上がりがみられ遺構が存在した可能性もある。またSC009の4層とも近いが、これらの関連は確認できていない。以下の出土遺物のうち、30はSC009の土層図のように下層からの出土でSX008の遺物とは区別できる。18~20も009に帰属する可能性がある。

出土遺物

出土したまとまりごとに取り上げた。そのまとまりは一緒に示す。1は遺物分布の南端東壁際で口を南東方向に横倒しにつぶれた状態で出土した。複合口縁の壺で器面は全体に荒れ摩耗する。外面上部は平行叩き後に刷毛目、下部は擦過がみられ、内面下部は刷毛目調整痕が残る。口縁部から胴部は1/3弱が残存する。胴部突帯は1条で一部重なることがわかるが欠損部が大きく全体は不明である。2は鉢で外面は上部を浅い削り状、下部は丸みのある工具でなく、内面は刷毛調整。1/6からの復元。3、4は同じまとまりで取り上げ同一個体と考えられるが接合しない。口縁部は倒置した状態で出土した。布留系の壺で内面屈曲部に長めの刻みを1.8~2.7cm間隔で施す。外面は3は刷毛目、4は擦過、内面削り調整で底に指頭痕がみられる。灰白色を呈す。1/4ほどからの復元である。5、6は口を北東に横倒しの状態で出土した同一個体だが接合しない。布留系の壺で外面に刷毛目、内面に削り調整が残る。5は一部を欠く。7は西に横倒しで出土した。在地系の壺で口縁部は横なで、胴部外面上部は横方向の擦過、中央部は一部削りが残るがなで消し、下部は削りの後に擦過痕がみられ一部に叩きの痕跡がある。内面は上部が横方向の削り、中位は刷毛目を施し、底近くは削りで凹凸が大きく煤ける。胴部下部は一部のみの残存である。8は底部で外面を上につぶれた状態で出土した。外面刷毛目、内面削り調整で布留系の壺であろう。9は東壁際で北東向きに倒れ割れた状態で出土した。布留系の壺片で他に同一個体はあるが接合しない。10、11は散乱した状態での出土で、外面の調整が異なり同一個体かは不明。10は短頭壺で外表面を刷毛目調整で仕上げる。1/4からの復元。11は外面を織維束のような工具で深めの調整痕が残る。12、13は布留系壺。12は西向きに横転して出土した。外面上部に横方向の刷毛目の後に波状沈線を書き、下部に縦方向の刷毛目を施す。全体に赤っぽく2次焼成によるものか。器面は荒れる。1/4からの復元である。13大きく二つに割れて出土した。外面上部は木目の疎な刷毛目を横方向に施し平行沈線をなし、中位以下は目の細かな刷毛目を中位で主に横、斜め方向、下部は縦方向に施す。全体に煤けて、中位に炭化物が残る。口縁部の2/3、胴部の一部を欠く。14、15はまとめての出土である。14は大きさは2、3のまとまりで出土し、口は北東を向く。布留系壺で外面上部は目が疎な横方向の刷毛目、そのすぐ下には目の細かな横方向の刷毛目を施す。器面は荒れ、接合しない破片が多い。1/4からの復元である。15は在地系の壺で器壁はやや厚手である。外面胴部は粗い刷毛目調整で煤が一部に残る。内面は横、斜め方向の刷毛目の後、口縁部は横なで、胴部は2、3mm間隔の櫛歯状の調整痕が深く残る。2/3が残存する。16は大型の短頭壺で口を南東に向けて横倒しで出土した。一部欠ける部分もあるがほぼ完形に接合した。頭部には横なでを施した三角突帯を施す。胴部や下にはごく薄い2cm幅の突帯を施し叩き目を入れるが、胴を全周せず1/3にはみられない。外面は口縁上部を横なで、下部は刷毛目の後に指おさえ、胴部上部は刷毛目に横方向の平行叩き痕が残る。下半は横方向の削りの後、粗い刷毛目を施す。内面上部は斜め方向、下半は縦方向の刷毛目調整である。刷毛目は部位で木目幅が異なる。17は短頭壺で3つに割れての出土。口縁部は刷毛目の後横なで、胴部外面は上部を刷毛目、

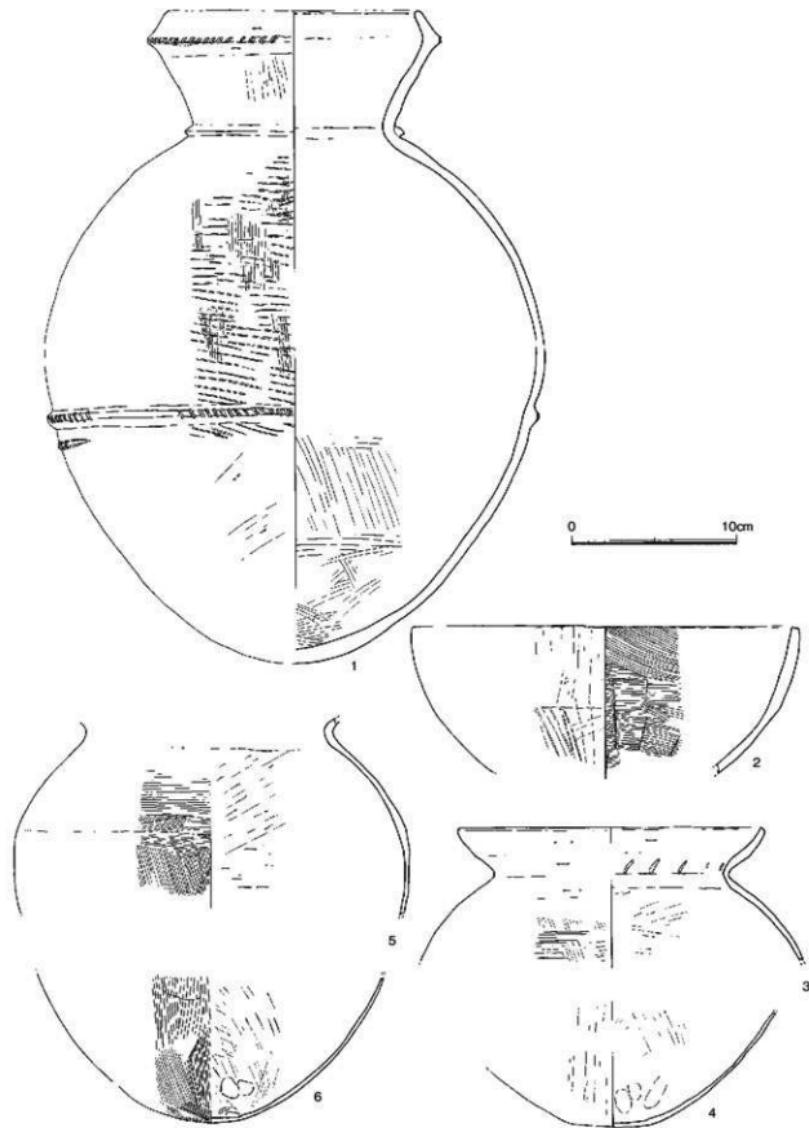


图 7 SX008 出土遗物实测图 1 (1/3)

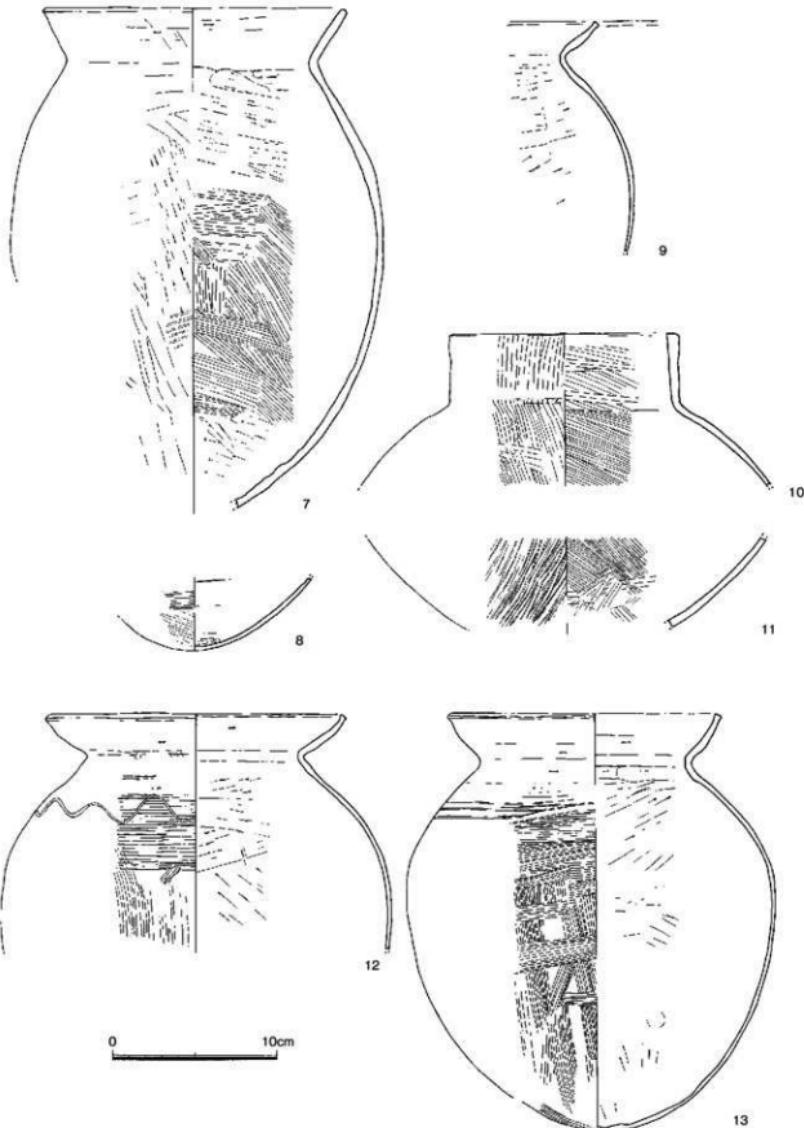


图8 SX008出土遗物实测图2 (1/3)

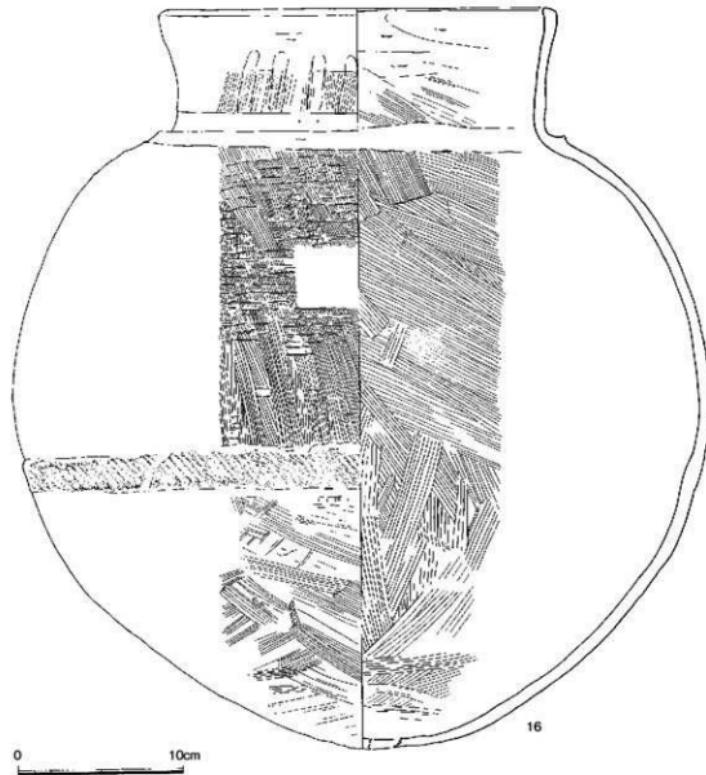
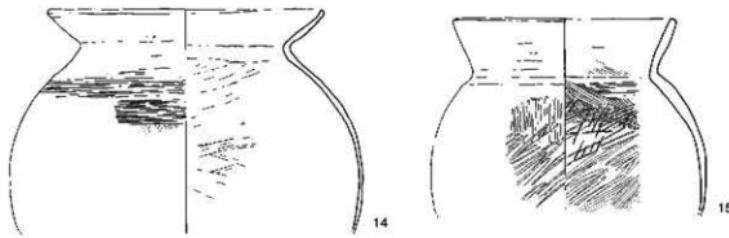


图9 SX008 出土遗物实测图 3 (1/3)

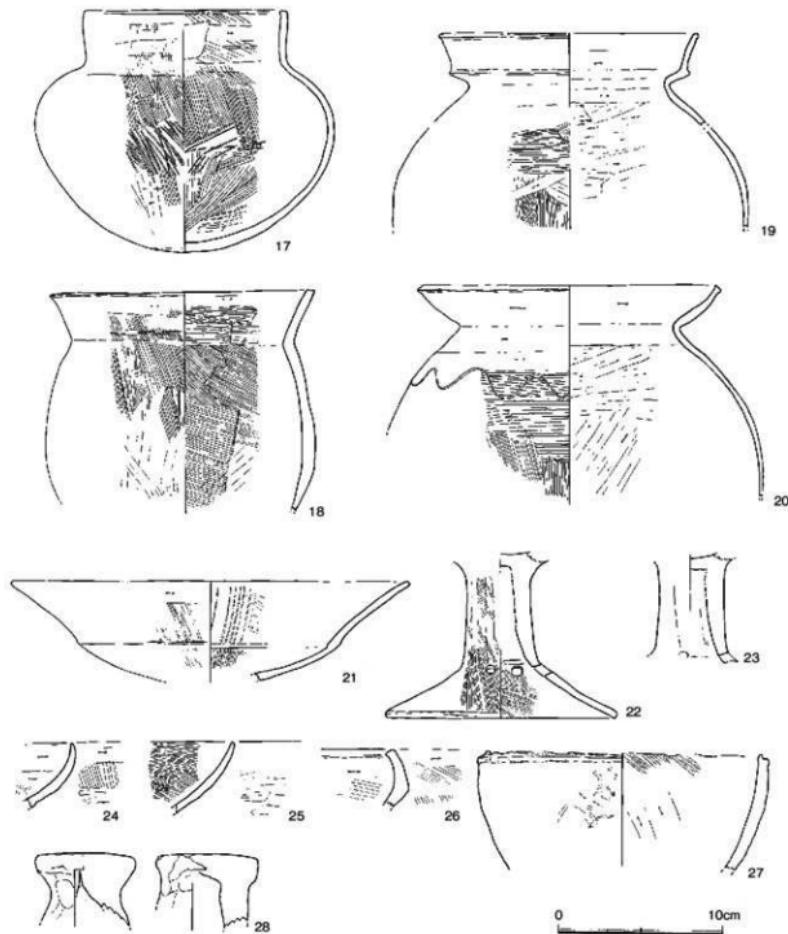


図10 SX008 出土遺物実測図4 (1/3)

中位は研磨状の荒い調整、下部は掠過である。胴部内面は刷毛目で中位に細い工具による擦痕がみられる。最大径部より上には全体に煤けて炭化物が付着する。18、19、20は最もSC009よりで、大きめの破片が出土した。18は在地系の甕で内外面に細かな刷毛目を施す。口縁部は2/3が接合し、1と一緒に出土した破片も接合した。19は山陰系の二重口縁壺で端部をシャープに成形する。図6に図示した位置と、1の横、

SC009西側、SX008の覆土と各位置の破片が接合した。胴部外面は上部が横方向、中位以下は縦方向の刷毛目を施し、内面は削りである。1/4からの復元。20は布留系甕で肩部に刷毛目調整の後に波状沈線を施す。21は高环で器面は荒れるが、内外面の刷毛目と内面の暗文がわずかに残る。1/4からの復元。22高环の脚部で正立した状態で出土した。内外面とも刷毛目調整で、焼成後の穿孔が3方にみられる。1/4からの復元。23から28は覆土中の出土である。23は脚部で器面はあれ、3方に焼成後の穿孔がみられる。23、24は椀で、24は内外面に刷毛目、25は外面削り状の調整である。27は鉢状を呈し、口唇部の一部に刷毛目工具状の圧痕がみられ、内面からの粘土が突起状をなす。内面は刷毛目の後で上げ、外面は斜め方向の調整痕が見られるが器面に縦方向の空隙が多い。小片からの復元。28は支脚で2方向の断面を示した。

(2) 壺穴建物

SC009 (図6、11~13) 方形の壺穴で東側の立ち上がりは確認できなかった。当初008との間に別の壺穴建物SC010との切り合いを検討したが確認できなかった。図6の東壁土層3層がそれにあたるものしねれ。南北は5.7m、東西5.2m以上の規模で、西側と北側に100cmから70cm幅の削り出しのベッド状造構を持つ。西、北側の壁とベッド状の内側の床に沿って側溝がめぐる。南側の側溝はピットとの重なりまでの検出である。北側の側溝が広がった部分は掘り過ぎの可能性がある。ベッド状までは深さ10cmほどが残り、さらに床面までの比高差は12cmほどである。床面では中央西側のSP192、東側のSP017が深めで、主柱穴になる可能性がある。その場合壺穴の規模は東西6.3m以上となる。覆土は上部が茶褐色の砂質土で締まりがなく、下部は暗褐色の砂質土である。

出土遺物はベッドを検出したレベルまでとその内側で分け、床面直上のものは別にした。29は中央部のくぼみ状で出土、30はこれに接して図6土層図のように床面直上で出土し、同一個体と考える。008の土器群と接するが、層、レベル的にも下位であり009出土と判断した。大型の甕の口縁と胴部で、胴部は1/5からの復元である。口縁屈曲部には浅い斜方向の刻目が3つみられるが、全周にあるかは不明である。器面調整は内外面ともに刷毛目が明瞭に残り、各部位で木目幅が異なり複数の工具を用いる。口縁下、胴下部には幅2~1.5cmほどの突帯を添付し、胴部中位には幅3cmほどで平たい突帯を付し斜方向に平行叩きを施す。

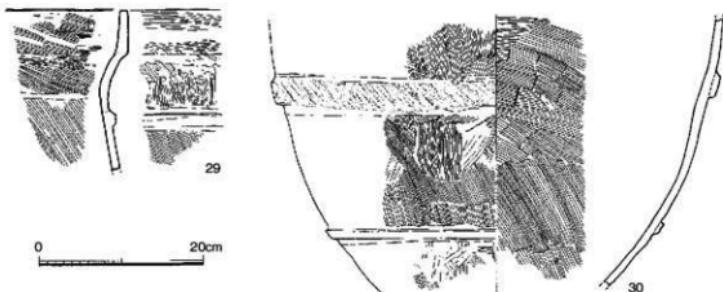


図 11 SC009 出土遺物実測図 1 (1/6)

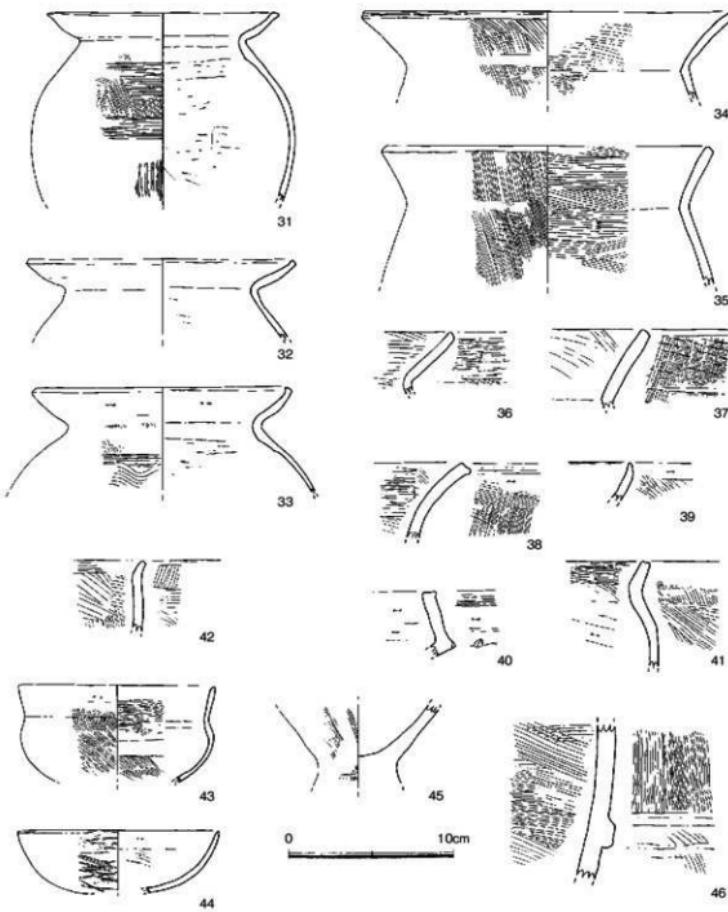


図12 SC009出土遺物実測図2 (1/3)

31~46はベッド状より内側で出土した。31~33は布留系壺で1/4、1/6、1/2からの復元。33肩部には刷毛目を波状に施す。31は全体が、32は口縁部外面が焼ける。34、35、36、37は在地系の壺で復元は1/6、1/5から。内外面に刷毛目調整を施し外面は焼ける。35、36、37は平行叩き痕が残る。38は長めの外反口縁で内面端部に接合痕様に粘土が剥げた跡がみられる。39は内済する口縁で椀状になるとと考えられる。40は二重口縁の屈曲部に刻目を施す。口縁部に刻目があるかは残りが悪く不明。41は短頭の鉢で刷毛目調整と内面胸部はなで。42は短く外反する口縁部で内外に深い刷毛目が明瞭に残る。傾きは不確か。43は

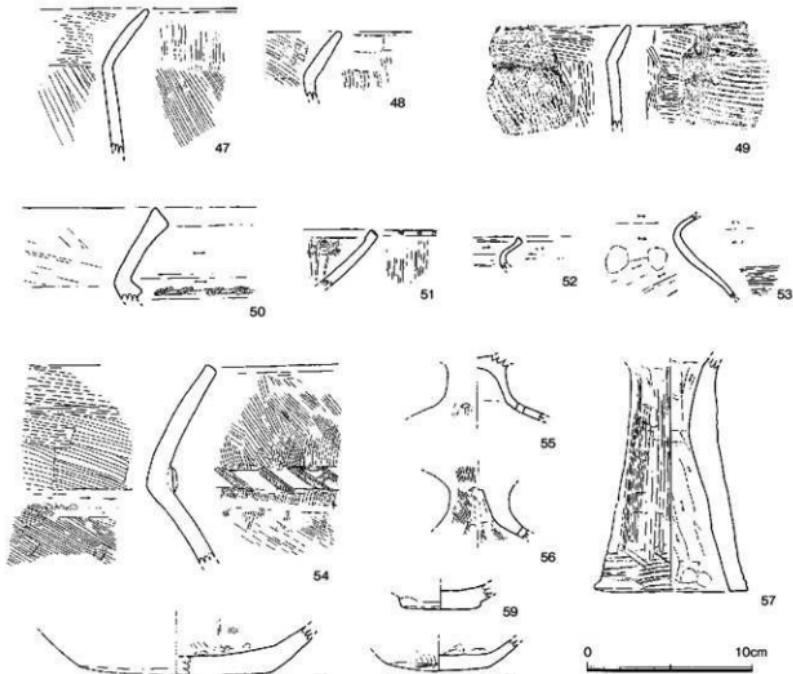


図13 SC009 出土遺物実測図3 (1/3)

小型丸底壺で内外面に細かな刷毛目を施し、器面明橙色を呈す。1/6からの復元。44は内外面に赤色顔料を施す壺で、外面は研磨状の細い調整痕が残る。体部の1/3が残り復元的に作図した。45は台付きの鉢か。46は大型品の突帯部である。

47から60はSC009の上部を中心とした覆土出土。47、48は「く」字口縁の在地系の壺で内外面に刷毛目を施す。49は短い「く」字口縁の壺で外面は横方向の叩きが明瞭に残り、一部縦方向の刷毛目を施す。内面は粗い刷毛目が深い。50は大型壺の頸部突帯に木口で刺み目を施す。51は口唇部に木口で刺突による刻目を施し、内面に浅い段をなす。外面は縦方向の刷毛目で器面は荒れ、内面は横刷毛の後に暗文を施し、全体が橙色を呈す。焼きが固く、浅い鉢か。52は短い口縁部の端部内面を跳ね上げる、強い横なので外面に煤が付着する。53は布留系壺で内面屈曲部に指圧痕が残る。54は大壺で内外面に刷毛目が明瞭で屈曲部外面の突帯に刷毛目工具の木口で刻目を施す。突帯下は刷毛の後に軽くなっている。55、56は高壺の脚部で焼成後の穿孔3個のうち2個が残る。55は器面が荒れ、56は細かな刷毛目調整で内面には放射状に施す。57は上部を欠くが細身の器台と考えられる。外面は叩きの後に縦方向の刷毛目調整を施し、内面上部には擦過痕と指圧痕がみられ、下部は長く強いなどの跡がみられる。南側包含層と接合した。58は丸みを帯びた平底、59は小さめの平底が付き、60はレンズ状に丸い。1/4、1/2弱、1/3からの復元である。

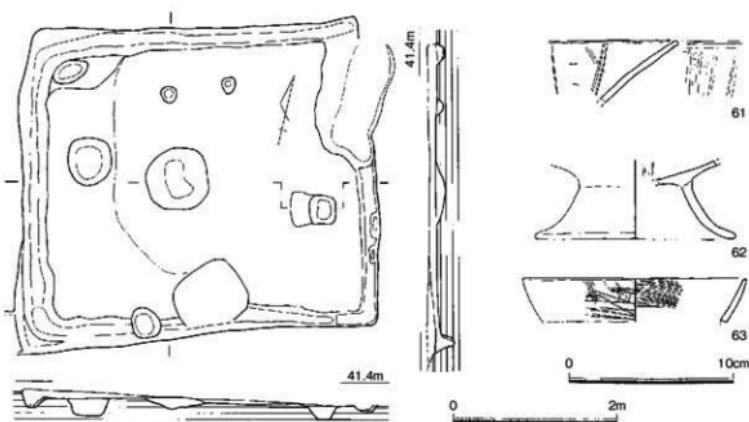


図14 SC007、出土遺物実測図 (1/60・1/3)

SC007 (図14) 調査区南東で検出した平面方形の堅穴建物で東西4.3m、南北4.0mほどの規模で外壁際に側溝がめぐる。大きく削平を受け、東側2/3は側溝のみが残り、床面も削平を受けている。図14の東西断面も中央ピット付近から東は削平を受けた後の現況である。西端の残りが良い部分で深さ7cmほどである。床面は砂礫層で、削平を受けていない部分には薄くマンガンを含む粘土が覆っている。覆土は茶褐色土でSC009とはほぼ同様である。中央ピットのみ黒色がかかり、質を異にする。007に伴わない可能性もある。南側はSD011、SP006に切られる。明確な主柱穴は見られない。

遺物は少ない。布留系の壺は見られない。61は高壺の壺部で外面は横方向の擦過の後縦方向の粗い研磨状の調整で、焼成後の引っ掛け痕が帯状に見られる。動物によるものか。内面は横方向の擦過の後、縦に暗文を施すが4cmほどの間隙がある。62は鉢等の脚部で器面外面は荒れる。内面は平滑な仕上がりで暗文風の痕跡がある。63は内湾口縁部で小型丸底壺である。外面は縦方向の刷毛目後に横方向の細い研磨状の調整がみられる。内面は横方向の刷毛目を施す。刷毛目の木目は内外面とも狭い。胎土は精良で橙色を呈す。1/7からの復元である。

(3) 溝

SD003 (図15) 調査区中央を東西に走る深い溝で、SC009を切る。幅は最大で36cm、深さ6cmで、確認した8mでの底の比高差は底で22cmほどである。覆土は黄色をおびた灰茶色土砂質土で底近くは粗砂が多い。床面は硬化している。遺物は少なく、須恵器の壺片が出土している。古墳後期以降。

SD011 (図5) 南壁沿いに東西方向の深い溝で、SC007を切る。幅は最大で90cm、深さ3cmほどで覆土は茶褐色土で007などと近い。遺物は少ない。64は高壺で外面に刷毛目、壺部内面に擦過痕がみられる。橙色を呈す。他に厚手の壺片、突起部などがある。65は小さな突起を口縁部もしくは疑似口縁に付す。器面が荒れ調整は不明。古墳時代以降。

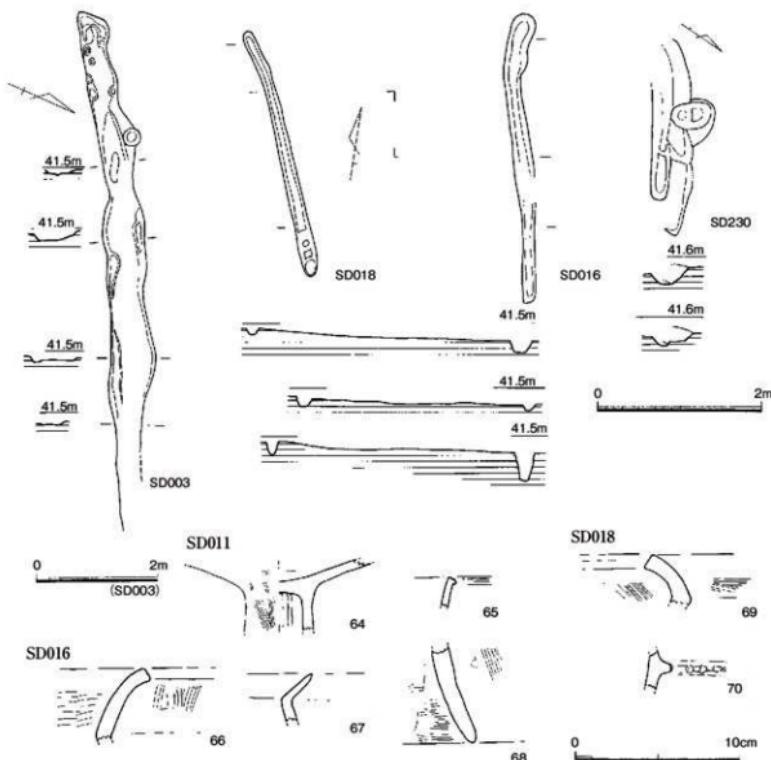


図15 SD003、016、018、230、出土遺物実測図 (1/80・1/60・1/3)

SD016, 018 (図15) 調査区中央に南北方向の溝が並ぶ。両溝とも暗褐色粘質土を覆土とし、他の遺構と異なる。幅15~23cmで竪穴建物の側溝の規模であるが、平行しておらず、少なくとも同じ建物の側溝にはならない。遺物は少ない。66から68はSD016出土。66は外反する口縁部で外面縦、内面横方向の刷毛目のために横なでを施す。67は口縁部が短く屈曲する小型の壺で器面は荒れる。68は内外面刷毛目で器台と考えらる。69、70は018出土。69は屈曲して内湾する厚手の口縁部で複合口縁として作図した。内外面に刷毛目が残る。70は小ぶりの突帯に刻目を施す。他に外面叩きの壺の破片がある。弥生後期後半から古墳前期。

SD230 (図15) SC009北側で検出した北東方向の溝で西側平面をとらえきれなかった。延長2.4m、幅54cmほどを確認し、東側は段をなし2条の溝の重なりともみられる。遺物は少なく、刷毛目調整の壺片が出土している。

(4) 土坑・ピット

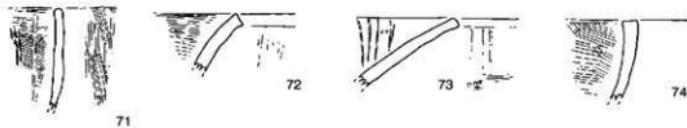
ピットよりも大きいまたは浅い遺構を土坑としたが、大型のピットとは区別はできないものがある。SK002(図16、17)調査区南側で検出した、浅いくぼみ状に黄茶色土がたまる。北側はやや直線的な落ちがみられたが、明確なプランは確認できなかった。南北150cm、東西130cmに広がり、深さ最大で7cmほどである。遺物は少ない。71は外面縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目の後に縦方向の刷毛目、細い工具でのなで痕がみられる。器面の成形はあまり。鉢状の器形か。72は外面縦刷毛目、内面横刷毛の口縁でシャープな成形である。73は高杯の杯部で内外面とも横方向の刷毛目または横なでの後に暗文を施す。74は深めの鉢で内外面刷毛目で外面は荒れる。このほか刷毛目、叩きの壊片がある。古墳時代前期。

図16 土坑、ピット実測図1 (1/40)

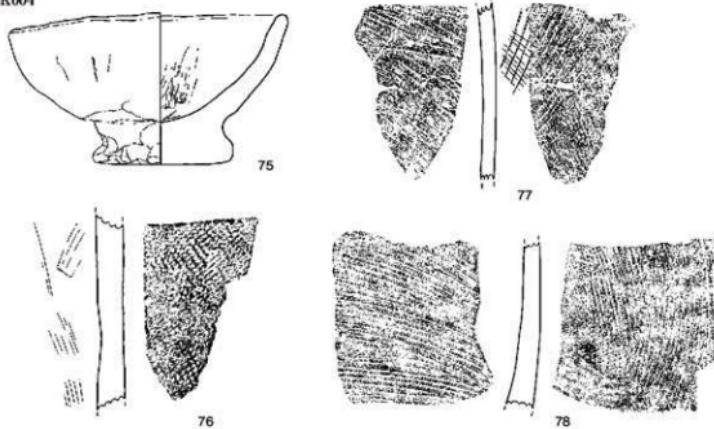
-17-

SK004（図16、17） 調査区中央で検出した。不整形の土坑として掘削し始めたが、2つのピットの重なりかもしれない。掘方上部で、北端部に75が正置した状態で出土し別遺構の可能性もある。その南には10～20cm大の蝶が密に入りその間に76から77が出土した。底には径20、15cmのピットがみられる。75は厚手の鉢で、縄文土器を思わせる台形底には指頭痕が顕著に残る。外面はなで仕上げで細い縦方向の間隙がみられ雑である。内面は縦方向の刷毛目の後になで上げ、口縁部は横なでである。内面底には小口痕が雜

SK002



SK004



SK005

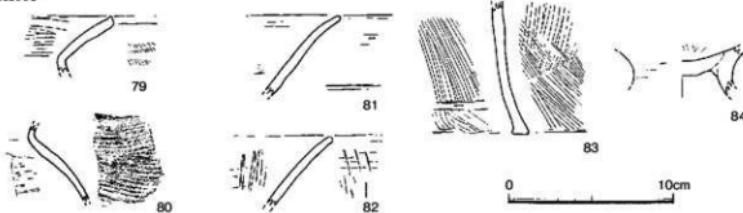


図17 土坑、ピット出土遺物実測図1 (1/3)

多な方向に多くみられる。76は器面の表裏とも暗灰色を呈し断面は茶褐色を呈す。須恵器、瓦とすれば焼きが甘い。器壁厚1.3~1.6cmと厚い。外面は疑似格子目叩き、内面は擦過で大堀または瓦か。77、78は外面に刷毛目を施す。同一個体か。77は木目が疎である。

SK005 (図16、17) SK004に切られる径60cmほどのピットで底は小さい。上部と40cm付近に礫がみられた。出土遺物は在地系の土師器の小片が比較的多い。須恵器の小片が1点あるが混じり込みか。79は在地系の壺の口縁で内外面刷毛目。80は壺の肩部で内面は削り、外面は平行叩きである。81、82は横方向の擦過かなで82は縱方向の暗文風の研磨がみられ、器面は灰白色を呈す。高坏または鼓形器台。83は内外面刷毛目でやや薄手の器台とした。84は高坏の接合部で器面は荒れる。

SK006 (図16) SC007を切る土坑で平面隅丸方形90×75cmを測る。遺物は少ない。刷毛目壺片などが出土している。

SK012 (図16、18) 南壁際に15×1mほどの楕円状に浅く炭が広がり SC007に切られ、北よりに径50cm、深さ6cmほどのくぼみに炭がたまる。東側に5cmほどの掘方が一部残る。炭直上とくぼみ中に遺物が出土した。85は内面に横なので後、縱方向に研磨を施す。二重口縁の壺か。86は口縁部が立ち上がり壺状になる。1/8からの復元で径は不確か。87は丸みがある底部。88は壺の外面を平行叩きの後になで上げる。内面は方向を違えた刷毛目を施す。同一個体の破片がややまとまって出土した。89は浅く幅広の突帯に叩きを施す。90は布留系の壺の口縁部で胴部片もみられる。

SK013 (図16、18) 調査区中央で東壁にかかる。長軸2mほどで段とピット状が重なり、複数の遺構の可能性がある。覆土は黄色かった茶褐色土でSC009などに近い。遺物はややまとまった量の破片が出土

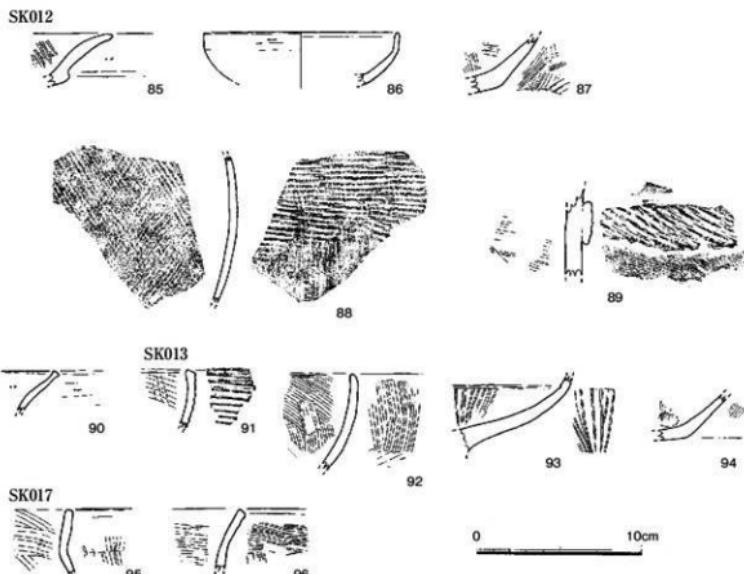


図18 土坑、ピット出土遺物実測図2 (1/3)

した。91は内湾する口縁部で外面平行叩き、内面刷毛目調整である。92は内外面刷毛目の鉢である。93は高坏で外面擦過、内面刷毛目を横方向に施した後に、縦方向に暗文を施す。94は丸みを帯びた底部である。

SK014 (図16) SC009を切る土坑で平面隅丸方形96×73cmを測る。遺物は少ない。

SK015 (図16) SC009の北に位置する70×60cmほどのピット状である。遺物は少ない

SP017 (図16、18) SX008の下で検出したピット状でSC009の主柱穴の可能性もある。90×60cm、深さ44cmを測る。95は直立する口縁部で内外面に刷毛目が見られる。96は外反する口縁で内外面に横刷毛目を施し、外面指頭痕がみられる。他に薄手の破片があり布留系甕と考えられる。

SK136 (図19、20) 75×95cmほどの不正円形で深さ20cmほどの床で2基の小ピットを検出した。101は布留系甕でこの1点の他は在地系の破片で、刷毛目調整を主とし、一部叩きを施す破片もある。102は内外面に刷毛目を施す甕の口縁部である。

SK158 (図19、20) 不整形の深さ15cmほどの掘方で、ピットとの切り合いもあり平面形は判然としない。遺物は少なく、在地系土器片が出土した。103は外反し内外面に刷毛目調整。104は緩く外反し、外面刷毛目の後なで調整である。

SP166・SP167・SK168 (図19、20) 深さ10cmほどの浅いくぼみ状のSK168の床でピット状のSP166、167を検出した。SK168の遺物は小片のみである。SP166は刷毛目調整の破片が多い。105は椀状で外面は削り調整、内面は刷毛目がはっきり残る。1/3弱からの復元。106は内外目刷毛目調整の鉢形で1/5からの復元である。107は複合口縁甕で全体に器面が荒れ、わずかに刷毛目が見られる。SP167からは主に刷毛目調整の破片が出土し布留系はない。108は二重口縁の甕か。口縁部を短く外反し、全体に強い横なでの後、内面に縦方向の暗文風の調整を施し、突堤には木口の押圧による刻目を施す。109、110は内外面刷毛目調整の口縁部。111は厚手の肩部で外面は縦方向の細かな刷毛目調整、内面は横方向の浅くやや幅広の刷毛目を横方向に施す。112は皿状で内面に擦痕がみられる。

SK178 (図19、20) 90×65cmの不正梢円形の土坑で、床でピットを確認した。遺物は少ない。布留系甕の頸部1点のはかは刷毛目調整の破片である。113は内面刷毛目の後なである。複合口縁か。114はレンズ状の底部で外面はなで調整である。

SP180 (図19、20) 平面75×65cm、深さ65cmほどの大型のピットで、比較的多くの遺物が出土した。117は大型の甕の口縁部で刷毛目調整の後に横なでを施す。口唇部に木口で施文する。118は「く」の字口縁の甕で外面に炭化物が付着する。119は突堤に木口で刻目を施す。120は皿状で内面に指圧痕がみられる。SK186 (図19) 幅43cm、延長140cmの縦長の平面形で深さ47cmを測る。遺物は少なく「く」の字口縁の甕片と小片が出土している。

SK187 (図19、20) 大型のピットで平面80×64cm、深さ28cmを測る。遺物は少ない。115はやや厚手の肩部を刷毛目調整の後に木口端部で密に刺突を施す。116は甕の頸部突堤に木口で刻目を施す。

SK194・195 (図19、20) SC009を切る。覆土は黄色を帯びた茶褐色土で009より濃い。遺物は少なく、刷毛目調整の甕片、甕の頸部突堤部片がある。

SK217 (図19、20) SD017に切られる。平面106×66cm、深さ20cmを測る。遺物は少ない。121は鉢形で外面は粗い刷毛目調整で動いた粘土が残る。内面は目の細かな刷毛目を横方向に施す。1/4からの復元。122は厚手の頸部の外面に刷毛目調整の後に小口を斜めに当てて刻目を施す。123は高坏で、外面は斜め方向の細かな刷毛目の後横方向の擦過、内面は横方向の擦過で、内外面に暗文を施す。胎土は細かく淡い橙色を呈す。外面に爪痕状がみられる。

SK225 (図19、20) 平面106×70cm、深さ12cmを測る。124は内外面に斜め方向の刷毛目を施し、口唇

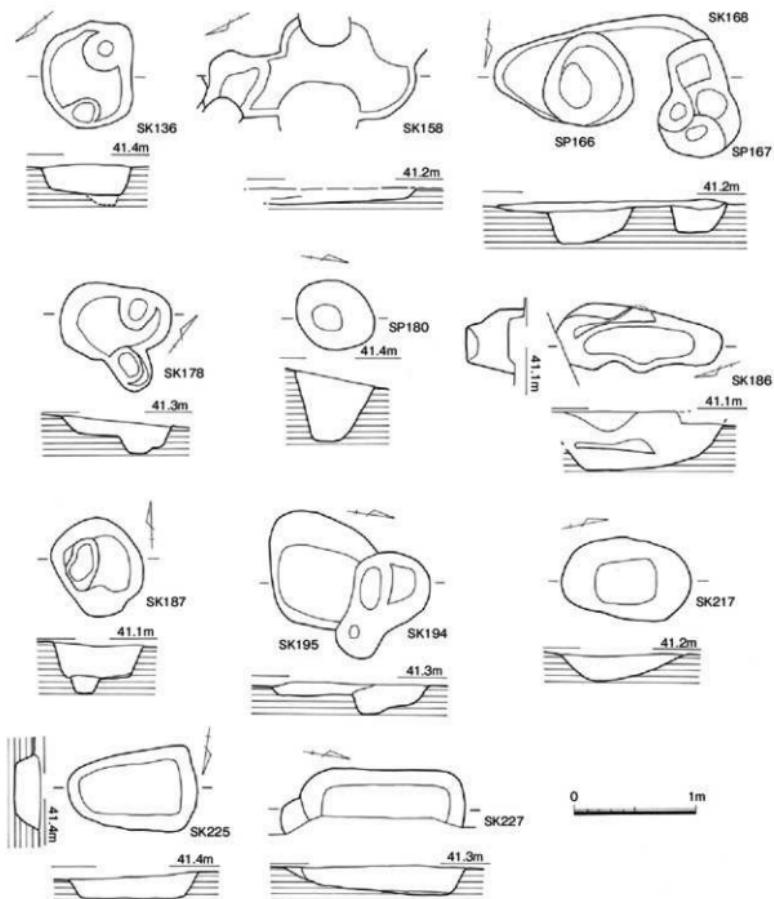


図19 土坑、ピット実測図2 (1/40)

部を強くなる。125は口唇部内面を横なででつまみ出し、外面に縦方向、内面に横方向の刷毛目を施す。外面全面に煤が付着する。126は横なでで口唇部に平坦面を作り、外面は斜め方向の刷毛目の後に縦方向の擦過、内面は刷毛目の後になれる。127は壺の口縁部で外面全面と内面のごく一部に煤が付着する。128は口縁部が大きく外反する。二重口縁か。横なでを施す。129は器台で刷毛目の下に叩き痕がみられる。SK227(図19) 東壁にかかる。南北133cm、幅45cm以上、深さ22cmほどの規模である。遺物は少ない。「く」の字口縁の壺、大形壺の突底部などがある。

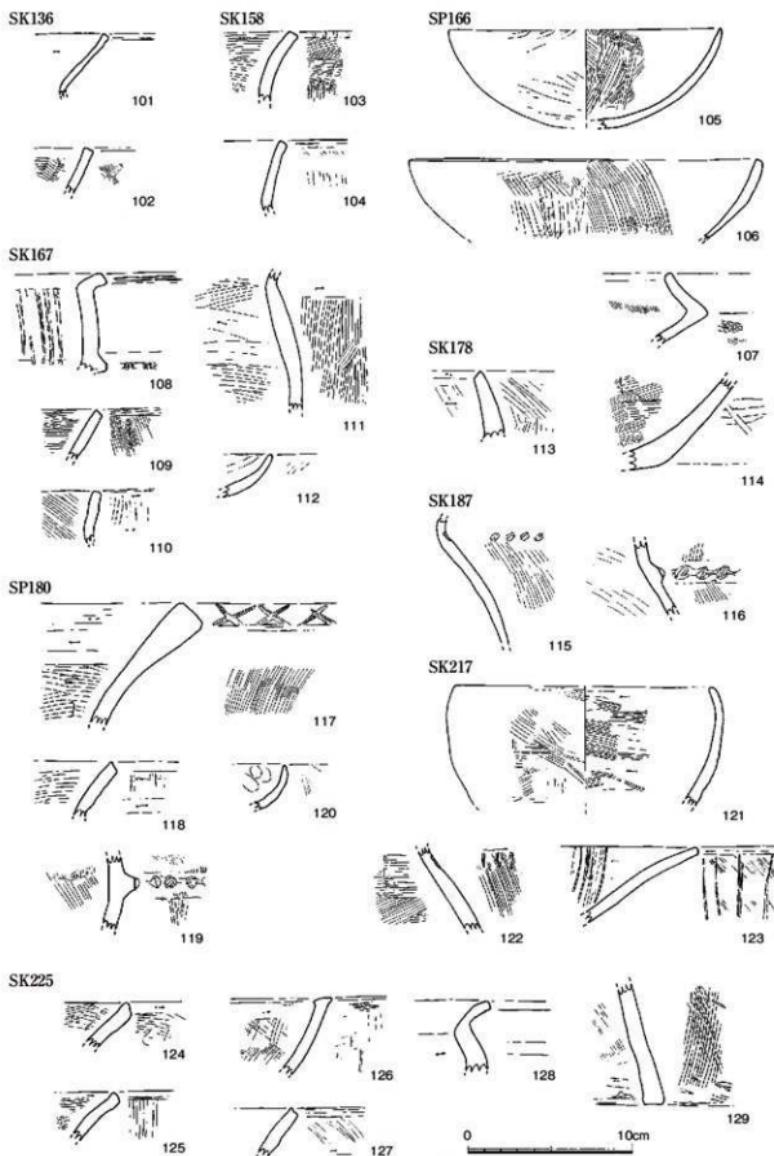


図 20 土坑、ピット出土遺物実測図 3 (1/3)

(5) そのほかの遺物 (図21~23)

これまで触れなかったピット、包含層等の出土遺物から触れていない遺物、残りが良い物などについて一括して示す。

131から142はピット出土の遺物である。131は内湾する鉢か。内外面とも刷毛目調整で口唇部が内外に突出する。外面は全体に煤が付着する。132は小型丸底壺で器面は荒れるが内面に刷毛目が見られる。1/5からの復元。133は大型の甕で外面は平行叩き痕が深く残り、縦方向の刷毛目がわずかにみられる。頸部下の突帯には木口による刻目を施す。口唇部には刷毛目工具によるのか押し引き痕がみられる。内面は荒

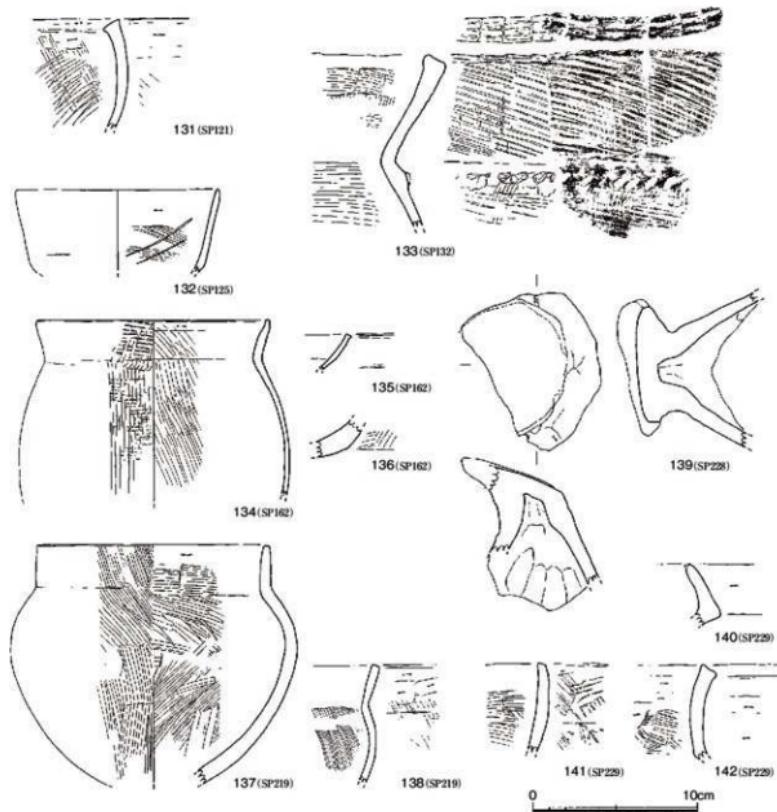


図21 その他の出土遺物実測図1 (1/3)

れているが、浅い刷毛目が残る。134～136はSP162出土。134は横方向の叩きの後、縦に粗い刷毛目を施す。内面は刷毛目が深く残る。1/8からの復元で径は不確か。135は布留系壺の小片。136はレンズ底の底部で外面なで調整。137・138はSP219出土。137は直立口縁の壺で器壁が全体に厚い。内外面刷毛目調整で、外面は下半を後になで、内面は深い。外面最大径部を中心炭化物が付着する。1/4からの復元。138は口縁部を横なで、胴部外面は刷毛目の後なで、内面は深い刷毛目である。139は器台でなで調整である。140から142はSP229出土。140は複合口縁の壺で外面は横方向のなで、内面は荒れる。141は外面叩きの後刷毛目を施し、内面は刷毛目の後上半を横なです。傾きがわからない。142は外面横なで、内面は粗い刷毛目で上半は横なである。口唇部も強くなる。

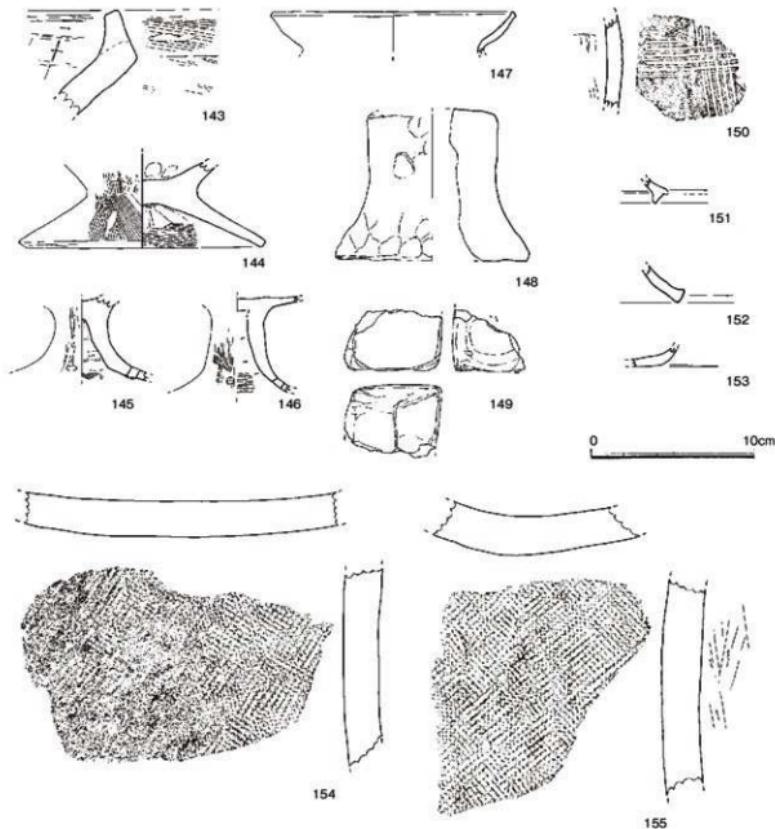


図22 その他の出土遺物実測図2 (1/3)

143から151、154、155は南東隅の包含層から出土した遺物である。143は分厚い口縁部で刷毛目その後になでを施す。144は鉢などの脚部で内外面に細かな刷毛目を施し、上部底に指頭痕がみられる。145、146は高坏の脚で外面は刷毛目の後に縱方向に研磨し、内面裾部は横方向の刷毛目調整である。焼成前の穿孔を施し146は穿孔3か所、145は割れて1か所が残るが3か所であろう。146は坏部内面に放射状に研磨を施し、丁寧な調整である。145は脚と坏との接合部に刺突がみられる。147は布留系甕の口縁部で1/4強からの復元。148は支脚で内面は破面で厚みは不明である。149は平面方形で支脚状を呈す。表面はなで調整で図の右面は中央がくぼむ。時期不明。150はなで調整の器面に深く櫛目状を十字に施している。151は須恵器の坏で蓋か。152、153は試掘時出土である。152は須恵器の脚、153は土師皿片でへら切りか。154、155は外面に疑似格子叩きを施す平瓦で、内面は一方向のなで調整である。一枚づくりであろう。器面は灰色を呈し、断面は茶褐色で焼きは甘い。SK005の76に近いが器壁が厚く2~2.5cmほどである。

161から167は縄文土器で、後世の土坑、ピット等から出土した。161は緩やかに外反する破片で口縁部近くと考えられる。外面に楕円押型文を施し、内面には縱方向に幅8mmほどの凹線状のくぼみがみられるが一つのみである。162は平柄式の口縁部で、内湾する口縁帯に斜め方向、横方向の順で沈線を書き、沈線間に刺突を施す。口唇部には浅い刻みを密に入れる。内面は横なでか。163は外面に木目状の擦痕がみられ、気泡または種子等の圧痕が多くみられる。164は外面に板目状の調整、内面は条痕が明瞭に残る。

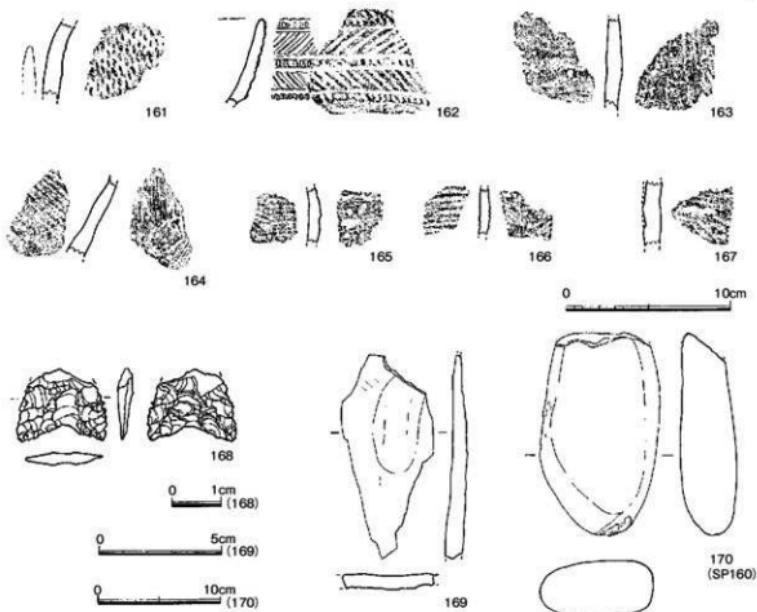


図23 縄文土器、石器実測図 (1/3・1/1・1/4・1/2)

底部近くの破片と考えられる。焼きは固い。165は外面を繊維束等による削りで種子状の圧痕がみられ、内面は板目または条痕がみられる。166は外面擦過で、内面は条痕がはっきりと残る。167は外面を繊維束状の粗い削りを施し、内面は荒れており、一部が残りなで調整と思われる。

168は黒曜石製の石鎌で先端を欠いている。表裏とも両側面から丁寧な剥離を施し、基部にえぐりが入る。長さ4.2cm以上、幅3.0cm、厚さ2.7mm、0.74gを測る。169は泥質の砂岩での片面を砥石として使用する。裏面は未調整または破面である。側辺は全て破面で、残存する長さ8.8cm、幅3.8cm、幅8mmである。中央部がややくぼむ。170はSP160出土の花崗岩で先端と側面の一部を敲打等で使用している。

IV おわりに

今回の調査では、土器だまり1基、竪穴建物2棟と溝状構造6条、土坑・ピットを検出し、縄文時代早期から中世に至る遺物が出土した。このうち主体を占めるのがSX008、SC007、009に代表される古墳時代初頭の集落遺構である。土坑、ピット群は在地系の土器がほとんどで時期が決め難いが、布留系の壺片を含むピットもあり、多くはSC009などとはほぼ同じ古墳時代はじめのものと思われる。

遺物が集中したSX008はSC009を切る状況で溢まった黄茶色土を中心に遺物が出土し、何らかのくぼみに廃棄されたものと考えられる。廃棄された竪穴建物の跡のくぼみなどが想定できよう。SC009の東側は立ち上がりを確認できておらず、別の竪穴建物との切り合いがあった可能性が考えられる。また、東側の調査区外での試掘では20cmから40cmの厚さの遺物包含層が確認されており、竪穴建物等の覆土の可能性がある。さらに、SC007の遺存状態からすると、調査区西側への竪穴建物の広がりも考えられよう。第3、5次調査でも狭い調査範囲で弥生時代終末から古墳時代初頭の住居跡を確認しており、また平成2、3年度の試掘でもこの時期の遺構は多く確認されている。早良平野を望む丘陵上に、古墳時代初頭の大きな集落が広がる状況が想定でき、今回検出した2棟はその最上部付近に位置する住居跡と考えられる。

古墳時代初頭以降では遺構番号を付けた155基の遺構のうち、須恵器が出土したのはSD003、SK005、SP185、218のみでいずれも小片で積極的に古墳後期以降と判断できる遺構はSC009を切るSD003くらいである。そのほかにSK004出土の格子目叩きの厚手の破片76が古墳後期以降である。また、南東側の包含層出土の疑似格子目叩きの平瓦154、155は、関連する遺構・遺物がない。一枚造りで奈良期以前と考えられ、周辺に関連する遺構の存在が期待される。古代以降では土師皿153が試掘で出土したのみである。古い時期では少量ながら縄文土器が出土し、早期の押型文土器、平格式土器を確認した。平格式は柏原遺跡で出土しているが、市内では数少ない出土例となった。

今回の調査で弥生時代から古墳時代はじめの集落の広がりと、豊富な遺物の在り方が明らかになった。遺跡西半にこの時期の集落遺構が密に広がるものと考えられる。



(1) 調査全景（東から）



(2) SX008、SC009（東から）



(3) 調査区全景（南東から）



(4) SC007、009（東から）



(5) SC007（東から）



(6) SC009（西から）



(7) SX008、SC009 遺物出土状況（南西から）



(8) SX008、SC009 掘削（北東から）



(9) 調査区北側（北東から）



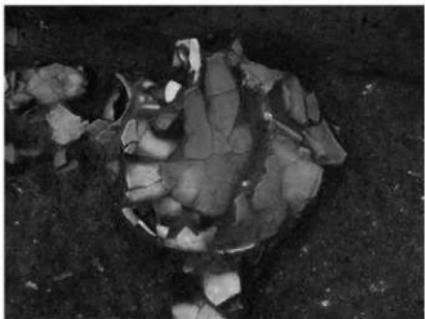
(10) 調査区北側（北西から）



(11) SK004、005（東から）



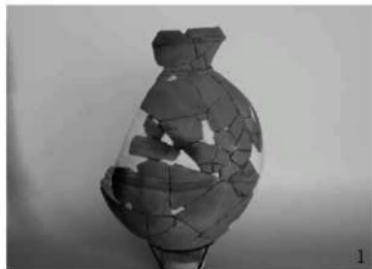
(12) SD016（東から）



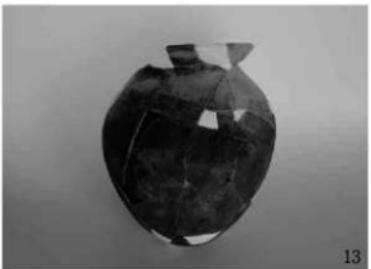
(13) SX008 遺物 1（西から）



(14) SX008、009 遺物 29、30を中心とした（北東から）



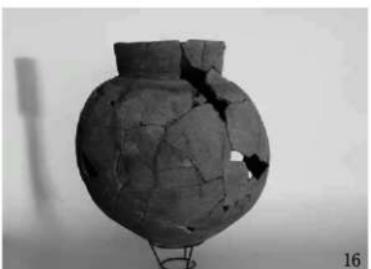
1



13



15



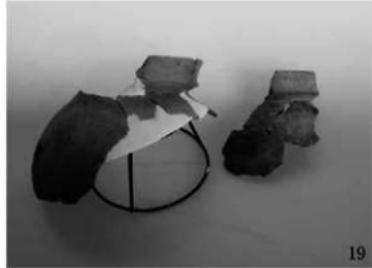
16



17



18



19



162

報告書抄録

ふりがな	はねどばる Cいせき5
書名	羽根戸原C遺跡5
副書名	羽根戸原C遺跡第6次調査
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1399集
編著者名	池田祐司
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号
発行年月日	2020年3月25日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
		市町村	遺跡番号	(世界測地系)				
はねどばる 羽根戸原C遺跡5	にしくおおあざはねどあざかどうら 西区大字羽根戸原字門594番1	40135	0399	33° 32° 43.5°	130° 18° 27.8°	20170904~20170921	307m ²	社会福祉施設 建設

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	
羽根戸原C遺跡6次	集落	弥生時代終末から 古墳時代前期	竪穴建物	弥生土器、 古式土師器	
要約		飯盛山の山塊から東へ派生する緩やかな丘陵上に位置する。現況は標高42mほどの水田である。表土を除去した黒褐色砂質土、砂礫層上面で遺構を確認した。遺構面は北側、東側に向かって緩やかに下がり、GL-20cm~70cmほどである。 検出した遺構は方形の竪穴建物2棟、土器だまり、溝、土坑、ピットである。竪穴住居跡は弥生終末から古墳時代初期と考えられる。SC007は壁溝と床面の一部を確認した。SC009は2辺にベッド状遺構を持ち、壁溝が見られる。SC009東側は土器だまりSX008に切られ古墳前期の遺物がまとまって出土した。出土遺物は、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が大半でコンテナケース12箱ほどある。この他に、疑似格子叩きの平瓦、押型文・平柄式土器片、黒曜石製石鏃などが出土している。 確認した竪穴建物は2棟だが、削平により消失した遺構も多いと考えられる。ピット、土坑等も同様の時期と考えられる。周辺には弥生時代後期から古墳時代前期の集落が密に広がると考えられる。			

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1399集

羽根戸原C遺跡5

羽根戸原C遺跡第6次調査
2020（令和2）年3月25日発行

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印 刷 株式会社インテックス福岡
